鈴木結生『 ゲーテはすべてを言った 』朝日新聞出版 2025 年

◎言葉についての小説　言葉とは何か？

３つの話法

國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』（17 頁）の「自由間接話法」を３つの話法を参考にして、
問題の「愛はすべてを混淆せず、渾然となす」について考えてみる。

「愛はすべてを混淆せず、渾然となす」

●直接話法

–ゲーテは言った、「愛はすべてを混淆せず、渾然となす」

語られた内容を伝達者がそのまま伝える

→ 引用のための形式 「Ｘは次のように書いている。「ＡとはＢである」」

この「直接話法」が成り立っていれば、問題はなかった、

ゲーテが言ったことを、博把統一（＝伝達者）がそのまま伝えたのだから。

●間接話法

–ゲーテは愛はすべてを混淆せず、渾然となすと述べた。

語られた内容を伝達者が自らの描写のうちに組み込む

→ 報告のための形式 （）「Ｘは、ＡをＢだと考えている」

こちらも「直接話法」同様に、問題はない、博把統一（＝伝達者）が、

自分の見解でないことを明示しつつ、自分の言葉で何かの内容を報告しているから。

●自由間接話法

–「愛はすべてを混淆せず、渾然となす」

語られた内容が、引用符なしにその文章の中に現れることになる。

→ 語られた内容が、組み込まれたことを指し示す印のなきままに描写に組み込まれてしまう話法

こちらは本作の然紀典の捏造と盗用の事件のくだりを想起させる。

➡本作で、博把統一がおこなったのはいずれの話法か？–

（145 頁～146 頁）

「（略）それは彼が世界全体に対し、『渾て然り』と言わずにはいられなかったからで、彼は実際、
こうも言ってるんですね」（略）「『愛はすべてを混淆せず、渾然となす』」/ やってしまった。（略）

ここで博把統一がおこなったのは、**間接話法**（「Ｘによれば、ＡはＢである。」）だったといえる。

ただし問題は、このときゲーテが言ったという証拠は見つかっていなかったということだ。
いわば、間接話法を偽装しているといえる。なぜ、間接話法を偽装したのか。
興味深いのは、博把統一が次のようにいうくだりだ。

「こうしてゲーテの名言を自分の文章の中に組み込むとき、統一は確かに「自由」を感じた。すべては成し遂げられ、軽くなった」(93 頁)

結果として、間接話法が偽装されたといえる、しかし、その動機には、自由間接話法と同様の、「自由」の実現があるのではないか。
飛躍するが、その自由には、博把統一の自由のみならず、当のゲーテの自由も賭せられているのではないか。

◎感想

162頁で、徳歌が綴喜に言ったように、『言語システムそのものが引用』だというのは、その通りだろう。

私たちは、現在の世界のありようや、あるいは身近な出来事、名状し難い感情などを、なんとか理解しようとしたり、掬い上げようとするときに、書物を手に取ることがあります(本作の主人公・博把統一にとってのゲーテ[1749-1832]のように)。「温故知新」という言葉は、まさにそのような営みを指しているといえるでしょう。そうであればこそ、たとえば古典は、それが遠い過去のものであっても、いまを生きる私たちに多くの示唆を与えてくれます。

けれど一方で、私たちが今まさに経験している現在の出来事は、過去のどんな本にも書かれていない、かけがえのない個別の出来事でもあったはずです。ゆえに、この個別の出来事に私たちが向き合うとき、それを掴まえるために、言葉を紡ぎ直していくことを迫られます。借り物やお仕着せの言葉ではなく、実感のこもった「個の言葉」として。

それはおそらく、ゲーテ自身も私たちに託していた願いではないでしょうか。彼は、自らの言葉を一字一句正確に模倣してほしいとは望んでいなかったのではないか(たとえば、「イエス」と「キリスト教」が、あるいは、「マルクス」と「マルクス主義」がそのあり方を異にしているというのは、このような事態をいうのではないでしょうか。ややもすると、いずれの後者も、教条主義的で排他的になり、本来のあり方を裏切ってしまう。おそらく現代アメリカの福音派のようなドグマ主義)。

綴喜が言うように、そもそも「一人の人間にすべてを言うことなんてできない」(73 頁)。むしろ私たちが、それぞれの場所でそれぞれの時間に、「生きた言葉」を紡いでほしい――ゲーテはそう願っているのだと思います。

そしてその願いが叶うとき、彼の言葉は、私たちの現在地で息を吹き返す。過去に書かれた言葉が、いまこの現在の言葉として立ち上がる。

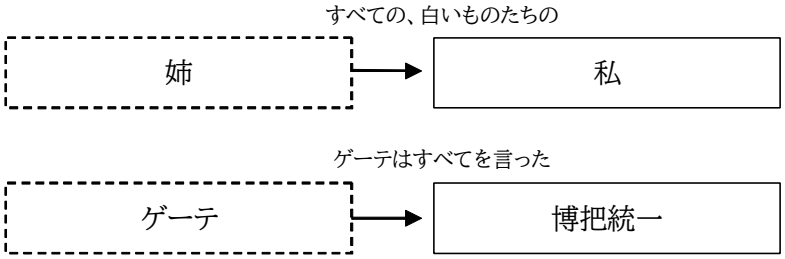
ゲーテなら、こう言うでしょう。「愛はすべてを混淆せず、渾然となす」と。

◎前回のハン・ガン『すべての、白いものたちの』について

今回の『ゲーテはすべてを言った』と、前回の『すべての、白いものたちの』を並べると興味深い点が浮かび上がる。『すべての、白いものたち』の、2 の「彼女」は、生後すぐに亡くなった姉を「彼女」として語る物語だった。姉は生後すぐに亡くなっているので「言葉」を発していない。

にもかかわらず、「言葉」を発していない姉の物語が語られている。

これは『ゲーテはすべてを言った』で問題となる、ゲーテが言っていないことを、にもかかわらず、博把統一がゲーテの言葉として語るという構造と相似だ。



ゲーテが言っていないことを、にもかかわらず、博把統一がゲーテの言葉として語るということが、“問題”だというなら、言葉を発しなかった姉の物語を綴るということもまた“問題”となるはずだった。ところが、この物語では、むしろそのことによって、私は姉をよみがえらせることができたのだった。このように考えると、博把統一が為したことも、（ゲーテを正しくコピーすることではなく）ゲーテをよみがえらせることだった。それは他ならぬ博把統一という「個」によってのみ、為しえたことだったといえるのではないだろうか。

➡矛盾に満ちた結論？

「個」の言葉は、誰の言葉でもない、ということではない。むしろ、それは私から徹底的に隔てられている、誰か（私にとっての姉、博把統一にとってのゲーテ）の言葉だ。それは自分の言葉というより、他人のものだった。にもかかわらず、私たちはそこに「私」という“個”と「姉」を感じ取ることができ、「博把統一」という“個”と「ゲーテ」を感じ取ることができる。さまざまな魂の結節点としての「私」という感受性は、近代において捨象されてきたものではなかったか。

おまけ

わたしが好きな茨木のり子の詩

『詩』

昔のひとが / はた と風の音に驚いて /

さらさらと歌に詠んでくれたので / 今のひとも気づくのだ /

昨日と今日の風の違いに はたと /

たくさんの詩人が日本の秋をうたってきた　/　詩の耳目を通して　/
秋を感じてしまっているのを　/　私たちは忘れている　/
それはいいことだ　/
詩人の仕事は溶けてしまうのだ　/　民族の血のなかに　/
これを発見したのはだれ？　などと問われもせず　/　ひとびとの感受性そのものとなって　/
息づき　流れてゆく
岩波文庫『谷川俊太郎選　茨木のり子詩集』